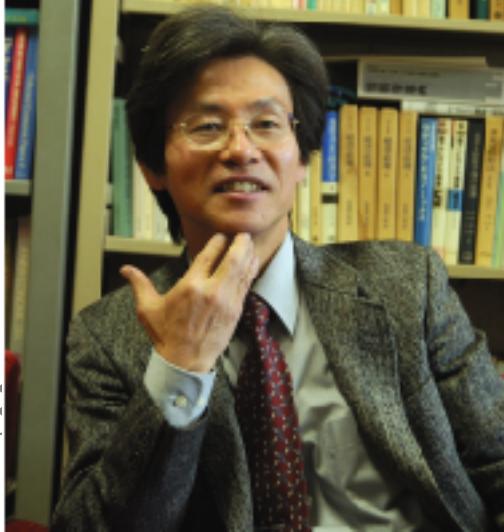


# 人を育む地域通貨とは



インタビュー

## 山中 守氏

yamanaka mamoru

阿蘇市では、ボランティア活動をされた方に感謝の気持ちを表す「地域通貨」を発行しています。私たちもこの制度をどう受け入れ展開していくべきいいのでしょうか…。今回、地域通貨や地域情報化の第一人者として全国で活躍中の山中先生に詳しく説明いただきました。

皆さんは、善意でボランティアをしていただいた方にお金を渡すのって、みんな利用し効果を上げている国があります。地域通貨の歴史は古く、海外にも盛んに利用し効果を上げてある国があります。

地域通貨の歴史は古く、海外にも盛んに利用し効果を上げてある国があります。

### お金でない地域通貨の仕組み

普通の地域通貨は、地域内で行います。しかし阿蘇市の場合は違う。国立公園を持つ観光地で、外部の人が多く訪れる特質を持つ。この外部の人も阿蘇市で地域通貨を使えるというのが、ほかにはないことなのです。

普通の地域通貨は、地域内で行います。しかし阿蘇市の場合は違う。国立公園を持つ観光地で、外部の人が多く訪れる特質を持つ。この外部の人も阿蘇市で地域通貨を使えるというのが、ほかにはないことなのです。

例えれば、よその学生が阿蘇へ修学旅行に来たとします。そんな時、阿蘇市の高校生が阿蘇のいろんなことを説明すればいいのです。その行為に対し地域通貨をあげます。高校生はそれを「これは僕がよその人に一生懸命説明したから市から感謝されたのだ」と理解し、次はもつとうまく説明できるようがんばろう、こんなことも勉強しようと思うわけです。

お金を渡していたらこの子は育ちません。また、高校生がもらつた地域通貨をお店で使う時、店の人が「ご苦労さま、阿蘇のために何かをしてくれたんだね」と声をかける、高校生も活動した内容を話し、地域で会話が生まれ出します。明るい地域内の交流ですよ。

地域通貨は誰もが持っているわけではなく、持っている人は阿蘇市のためにはかをしてくれた人なのです。だから地域通貨を差し出されたら、お店の人はまずは「ご苦労さま」そして「いらっしゃいませ」というのが自然だと思うのです。その言葉に観光客は「阿蘇の商店街は違うなあ、阿蘇の人は教育が進んでいい」と感じるでしょう。そういつたお金で買えない気持ちのやりとりを行う中で、商店街や地域の発展に結びつけていくのが地域通貨の基本的な仕組みです。

子どもたちが育っていく中で重要な大人の姿もあります。

### 子どもと地域通貨

地域通貨は、阿蘇の子どもたちが使つて「いいな」と思える政策でないと長続きしません。言い方を代えると、地域通貨本来を知るには、お金のはね返りを期待する大人より、子どもたちの利用展開を見る方がわかりやすいということです。

例えば、よその学生が阿蘇へ修学旅行に来たとします。そんな時、阿蘇市の高校生が阿蘇のいろんなことを説明すればいいのです。その行為に対し地域通貨をあげます。高校生はそれを「これは僕がよその人に一生懸命説明したから市から感謝されたのだ」と理解し、次はもつとうまく説明できるようがんばろう、こんなことも勉強しようと思うわけです。

お金を渡していたらこの子は育ちません。また、高校生がもらつた地域通貨をお店で使う時、店の人が「ご苦労さま、阿蘇のために何かをしてくれたんだね」と声をかける、高校生も活動した内容を話し、地域で会話が生まれ出します。明るい地域内の交流ですよ。

都会の高校生も地元の高校生の案内に感動し阿蘇の修学旅行が印象に残るでしょう。説明する方も外部の人たちに対し、もっと詳しくなりたい、専門的に勉強してみたいと思うようになります。

そういうやる気で勉強すると全然違つてきます。もっと学びたいと思う時こそ、能力が一番伸びる時です。やりがいや、やる気を育てる人材教育です。

が定年を迎え、退職者がたくさん出ます。この人たちを農村で受け入れる、これもビジネスとして、とてもいいと思います。農村のレジャー化も進んでいいことでしょう。ただこれは、都会の人のためであり、地域の子どもたちにどれだけ関係があるのか考える必要があります。

## 地域活性を考える場づくり

### テレワークセンターをUターン者の受け皿に

阿蘇市でもう一つの日本を代表する取り組みといえば「阿蘇テレワークセンター」の事業でしょう。これは、平成9年、旧郵政省が阿蘇地域の特質と将来性を踏まえ実施した情報通信基盤高度化事業で、本社が東京あつても、光ファイバーとコンピューター技術を利用して、阿蘇に居ながら東京と同じ仕事ができる勤務形態を可能とした取り組みです。

例えば、システム開発などの仕事はストレスが溜まりやすい。阿蘇の自然の中で仕事をすることで、心身ともにリフレッシュされ、開発能力が上がるというものです。

情報・技術を持った者が農村に来るといふことも仕事が生まれます。テレワークセンターには、その受け皿となりえる機能があるのですから、きちんと政策にあげるべきでしょう。あと数年で団塊世代のサラリーマン

## 子どもたちには最先端のことでも学ばせる

昨年、波野小学校は国際理解教育の指定を受け、私も公開授業を含め10時間の授業を担当の先生と一緒に行いました。近くのお年寄りにも学校に来てもらい、戦後の波野の暮らしを勉強しました。

当時盛んだった畜産の話では、なぜ、おじいさんたちにとつて牛が大事なのか子どもたちは分からぬ。おじいさんは役牛として一緒に働いたから、家族と同じくらい牛が大事なのです。しかし、子どもが今見ている牛はすべて食べるだけの牛。話している方と聞いている方がまったく違う世界にいるという受け皿の違いで起きやすい、情報社会の中の情報不足です。しっかりと伝えるようにする必要があります。

また、畜産がこのように衰退したのは、おじいさんやお父さんのせいじやないんだ。貿易の国際競争の結果など、世界の情勢の流れがこの波野にも押し寄せてきたんだと話し、国際的な広い視野から波野を見る大切さを一緒に学びました。

この時、お年寄りの話の録音作業に子どもたちはICレコーダーを使いました。子どもたちは見事簡単に使いこなします。逆にテープを見たこともない。子どもたちのスタートはICからのことです。だから、教育は、最先端と伝統のこと、この2つを並行して学ばせることが大事です。子どもの活動行事が地域のことばかり、伝統的なこ



### 山中 守 プロフィール

昭和23年生まれ。熊本大学教育学部教授。九州大学大学院修士課程修了後、アメリカ系コンピューター企業のソフトウェア開発本部に勤務。その後、九州大学院博士課程修了。専門は経済学、社会情報学。

現在の役職は、総務省「情報通信研究」評議委員、総務省「電子政府」推進委員、「熊本県次世代情報通信推進機構」副理事長など。

主な著書「マルチメディア社会と地域づくり」「農業情報処理」文部科学省検定済教科書など。阿蘇市との主な関わり…阿蘇市地域通貨検討委員会委員長、阿蘇テレワークセンターアドバイザー、国際理解教育(波野小)アドバイザー

とばかりになつていませんか？ 最先端のことも教えてください。戦後60年で日本は時代が一回転したのです。昔と違い、米代より電話代の方が高い、今は情報化社会なのです。

全国に先駆け阿蘇市が取り組んでいる地域通貨にしろ、テレワークセンターにしろ、もっと子どもたちに見えるようにすべきです。「わあこんなことをやつてるんだ！」と思わせる場をつくつてやることです。すると、子どもたちは勉強しないと出来ないことがたくさんあると理解し、勉強を始めます。高校生の案内ボランティアのような、やりがいのある活躍の場をつくつてあげることです。